

ベンジャミン・デイスレリーの「真の貴族」について

松 原 正 道

序

一九世紀英国に於いては自由主義の隆昌と資本主義の発展が調和と伝統を誇る英国に、資本家階級と労働者階級との「富者」と「貧者」と云う恰も違う星の住人であるかのような、越え難い深淵を距てた「二つの国民」を生み出したと云われる社会状態を現出していたのである。⁽¹⁾

そして、その中の「貧者」は、エンゲルスの「イギリスにおける労働階級の状態」(一八四六)やディケンズの「オリヴァー・トウイスト」(一八三八)に、又、トインビーの名著「産業革命論」(一八八四)に記されている如く、日の当らない存在として極端に貧しい生活の故に大きな社会問題となっていたのである。⁽²⁾

そこでディズレーリは、「リアリストとしての彼はまず憲法上の重要な諸制度が残存している限り、その周囲の機能を強化することによって社会の解体を防止する枠組として利用し得ると考えたのである。このため彼は、まず第一に君主の役割りを重視した。彼は、社会解体の根本原因を階級的利己主義にあるとし、これを是正緩和する機能を君主に求めた」⁽³⁾あるいは、「ディズレーリは君主制がイギリスにおいては階級の障壁を超越した一つの制度であり、その人気を回復することが二つの国民への分裂を打破するために必要であることをはっきり知っていた」⁽⁴⁾と指摘されるように、これら「二つの国民」を「一つの国民」に戻すことを自らの政治使命としてそれを政策面で実行していったのである。

そして、それは「トーリー・デモクラシー」とか「フアンシー・デモクラシー」として現実政治の中に現われ、それが可成りの成果をあげたと云うことは大方の認めるところである。そこには又、「真の貴族」論が彼の民衆に対する考え方の一方の側面として存在するのである。

そして、「真の貴族」論には、産業革命以来社会問題になってきた労働者を中心とする民衆と共に、君主を中心として古い伝統を維持してき

た英国の憲法の存在を無視することはできない。彼の政治家としての立場を考える場合、これら民衆に対する考えと英国の憲法に対する考えとを如何に實際政治に反映させるかと云うところにあったと云える。これら両者を如何に調和させるかと云うところに彼の政治があるのであって、これら両者のバランスをとった結果が現実政治として表に現われてきたものであると云える。

そして、このバランスをとった結果として現われてくるものの根底になった彼の政治思想の中で非常に重要な役割りを果しているのが「真の貴族」論であり、これが彼の政治政策に与えている影響は少なくないと考えられる。

従って、この小論では彼の政治家としての性格をよく表わしている「真の貴族」論に焦点を当て、それが彼の政治思想に於いて如何なる役割りを果しているかを探りたいと思う。

社会的背景

ナポレオンによって巻き起された一大旋風の渦中にあったヨーロッパに於いて、英国の国運が賭けられたウォーターローの戦いを勝利に導いた立役者であり、後に、公爵に叙せられ一九世紀英国の政治に陰然たる勢力を振ったウェリントン将軍が後年述懐して、「ウォーターローの戦勝はイートンの運動場に於いて得られた」と語ったと云うエピソードは有名な話である。この彼の言葉の意味するものは、一八三二年以前の英国に於いては立法、司法、行政、兵馬等の権力は全て貴族、地主階級の手の中にあつたのであるから、この戦争を遂行する責任と同時にその功績も当然彼らに帰せられるべきであり、自らが属しているこれらの階級の勇氣と勝利を讃えた言葉であると云える。そして、彼ら貴族、地主階級はイートン、ハローと云ったパブリック・スクールの出身者であつて、そこでの教育が後年の彼らの国家的活動に役に立ったと云うことを意味しているのである。

云うまでもなく、英国ではケムブリッジ、オックスフォードを頂点とする大学と、そこに至る予備門としてのイートン、ハローと云ったパブリック・スクールが貴族、地主階級の教育の場であり、それ以外の教育機関出身者は一段低く見られ、社会的活動に於いても差しさわりのあるほどであつた。そして、七つの海を支配する大英帝国の榮譽を担つたのは彼ら貴族、地主階級であつたのである。

又、大英帝国の榮譽を考える場合、これを支えるものとしての富の基盤を見逃すことはできない。世界史の趨勢を先取りした英国は他国に先

んじて産業革命を達成し「世界の工場」の名をほしいままにしていた。そして、ヴァイキングの子孫を称する民族性と相結び各地に植民地を建設し世界の富を英国に集めたのである。かくして一九世紀英国の基盤は長年の伝統に支えられた貴族、地主階級と産業界を握っていた新興の中間階級⁽⁷⁾(ブルジョアジー)によってゆるぎないものになっていたのである。

そもそも英国の貴族の濫觴については、一四世紀初頭迄はアール(Earl)とバロン(Baron)の二段階であったが、次第に多等級化され、一三三七年に時の国王エドワード三世がフランスとの間に戦われた百年戦争で活躍した長男のエドワード皇太子(Edward the Black Prince)にコーンウォール公(Duke of Cornwall)の称号を与えたのを初めとして、以後、王族の中から公爵号を与えられる者が出るようになった。そして、一三九七年、リチャード二世は史上初めて王族以外の者を公爵に叙したが、彼は既に一三八六年に侯爵(Marquiss)位をも創設していた。次いで、一四四〇年になると、ヘンリー六世が子爵(Viscount)を創設し、一五世紀半ばまでには公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵と云う序列の貴族五等級が確立し、以後、現在に至るまでこれが継承されているのである。そして、一九世紀初頭にあつてはこれら貴族は地主と共に支配階級として社会の主要な部分を構成していたのである。⁽⁸⁾

尤も、こうした歴史を持つ貴族も、「ブライス・コリアー Price Collier は一九〇九年に於て、英国の上院議員中には、大憲章を強制した豪族の男系の後裔も、アジンコートで戦った貴族の男系の後裔も一人もいず、ガーター勲章制定の時——一三四九——からの男子の血統を誇り得るものはロッツレイ Wrotesley 家のみである旨を記しているのであるが、ディベリウス Wilhelm Dibelius は英国上院議員の半数以上は一八三一年以後の爵位を持っていることに注意を促している」と云う指摘、又、新井嘉之作氏の指摘⁽⁹⁾の如く、貴族を含む地主層が一六世紀、一七世紀を境いとして大きな変動を来し、新、旧地主階級の入れ換えが行なわれた云うことと、特に、一六八八年の名誉革命を以て近代地主が支配権を握ったと云う事柄からして、一九世紀の貴族、地主階級は旧来のそれと較べるとおのずからその性格を異にしていると云うことが云えるだろう。

そして、社会の中心として重要な役割りを果している英国の貴族、地主階級の特長を考えた場合、特に他の国のそれと比較して、まず第一に挙げられる特長はその開放性、柔軟性、そして、融通性である。⁽¹¹⁾これは、ネルソンがトラファルガーの海戦に臨んで云った、「貴族に列せられるか、ウエストミンスター寺院に葬られるか」と云う有名な言葉からもわかるように、軍人たると、政治家たると、実業家たると、いな、文学

者たるとをもすら問わず、第一流の成功を博し、国家に貢献した者は皆貴族に列せられると云うことでもってわかるだろう。そして、一九世紀に於いてはその特長が一層顕著に表われており、英国の貴族階級は絶えずあらゆる方面の成功者を自己の列伍に迎え入れて、自らの生命を新たにすることを怠らなかったのである。⁽¹²⁾

こうした英国の貴族階級の特長についてエマソンは、「英国史とは門戸を開放した貴族政治に他ならない」⁽¹³⁾と云っている。尤も、そうした彼も、そこに入るための入会金が困難で高いことを指摘しているが。そして、「上流階級 Upper class に属する者は、本當の貴族 nobility を別として、地主 squires 知識階級 professionals の二階級である。……パブリック・スクールやオックスフォード、ケムブリッジに於ける教育を共にすることによって教養・氣風の上からも同じ階級に属すると云う意識が強いのである。これ等の階級が民衆を統治するということは広汎な意味に於いて貴族政治であると云うことが出来る」⁽¹⁴⁾と云う英国の支配階級についての指摘とその貴族性についての指摘がなされるのである。

エマソンは又、こうした英国の貴族階級について、「高邁な精神をもち、活発で、教育があり、富と力を生れながらにして持つ者、これがイギリス貴族である」⁽¹⁵⁾と云っている。彼らは広大な土地を所有しており、時には、それが一州の広さに匹敵したり、自分の館から海岸まで百哩の間を他人の土地を踏まないで行くことができる等と云う場合があり、⁽¹⁶⁾彼らはそうした所領に本拠を構え、自ら地主としてそこに住み、地方の生活に仲間入りをしている。それ故に彼らには地盤のしっかりした力強さがあるのである。⁽¹⁷⁾「土地は義務を持っているが、又、名誉を持っている。大きな名誉を持つ者は大きな義務を持たなければならない」⁽¹⁸⁾と云う言葉に示されているように、土地所有が単に個人の虚栄や贅沢を満足させる⁽¹⁹⁾と云うだけのものではなく、社会生活に於いて貧困に喘ぐ民衆を救済し、教会に寄進を為し、又、長い間英国の伝統を保持してきた地方制度を維持するもので、特に、治安判事として地方の秩序を保つと云う大事な仕事があった。その上、一朝有事に際しては武器をとって国土を守ると云う役目があり、「重い義務を負う者」⁽¹⁹⁾として民衆を指導してゆくと云う大きな役割りがあると云うことを彼らはよく認識していたのである。そのためには、それに相応しい徳性、才能、財産が必要とされ、広大な土地からあがる経済力、又、イートン、ハロー等のパブリック・スクール、ケムブリッジ、オックスフォード等の大学に於ける教育が彼らの支配階級としての特質を育成するのに役立ったのである。⁽²⁰⁾こうした国家、社会の指導者としての彼らの特質故に先きに見たウエリントンの述懐も頷けると云うことになる。

そして、「商工業者が、進歩、自由のために戦うことに専らで、その犠牲に供せられる弱者の声に耳を仮そうとしなかった際、貴族、地主が

多年に亘る温情主義の伝統から産業主義の弊害を矯めることに貢献したことは、一九世紀英国の歴史を読む者の注意すべき事柄である」と云う指摘がなされるのである。⁽²¹⁾

こうした特質を持つ貴族、地主階級の存在する時代にあつてディズレーリは、「我國の富の配分の帰結が貴族的憲法となり、又、我々が自由を愛好した結果が市民的権利の平等に基づく貴族制的憲法となつてゐる。貴族制的憲法が事実上高貴な民主主義であることを誰が否定しようか。これこそ英国人が常に身を捧げんとしてゐる憲法なのである」と自らの憲法觀を披瀝してゐるのである。⁽²²⁾彼の政治家としての立場を決定づけているものとしての憲法觀は、「英國は家庭的な国である。そこでは家庭が尊敬され、炉辺が神聖視される。國民は一つの家族王室によって代表される」と云う言葉でわかるように、君主中心のものであつて、彼にとって君主とは單なる象徴ではなくして、英国國民の長であり保護者であつて、丁度、家庭における父親のようなもので、そのためには全ての階級から超然とした存在でなければならなかつた。この点、彼の政治思想に大きな影響を与えてゐると云われるボーリングブルックの「愛国王」Patriot Kingの考えに通じるところがある。

そして、この君主を中心として地主、聖職者をはじめ労働者に至る全ての階級の國民がそれぞれ自己の本分を守り、その立場を忠実に保持してゆくことが肝要で、急激な変化のない調和に富んだ伝統のうえにどつしりと基礎を据えた国家体制こそ英國の憲法であるとするのである。⁽²³⁾そして、こうした君主と民衆との間にあつて仲介役を果すのが貴族、地主階級の役割りだと云うのである。

従つて、かかる憲法（国家体制）に対する考え方の故に、「彼にとつて政治組織の中には二つの実体があつた。即ち、円を中心における君主と、その円周を為す民衆とがそれである。そして、この両者の正常にして円滑な相互關係の維持に、物事の全ての健全性と鈞合いとが依存してゐる」とか、「理想化された封建主義体制」と云う評価がなされるのである。⁽²⁴⁾

しかし、世の中の趨勢はこうした彼の考え方とは裏腹に、資本主義の發展とそれに伴う自由主義の風潮が英国固有の仕来りや慣習を破壊し、君主、貴族、教会等の制度を残してはゐるものの、曾てのような有機的機能を失ひ、社会の中核を為していた地主階級の没落を促し、地主階級に代つて社会の指導的立場を占めるようになってきた資本家達は富の追求をその最大の目的となし、自己の利益追求のみに専念して、地主階級が土地を持つてゐるが故に民衆の指導者として社会に正義をなし、秩序維持のために働いたのに対して、資本家達はそれとは裏腹に自己の利益を追求するあまり社会に混乱と貧富の差をもたらし、それがため大きな社会問題をひき起してゐたのである。

こうした社会の状態についてディズレーリは、「自由主義の意見は富と力のある者にとっては非常に便利な意見である。彼らは自己犠牲に反対する。例えば、自由主義意見の持主は土地所有が商業的見地からのみ考えられるべきであると主張し、土地からあがる収入について気を使う。そして、土地所有者が社会に対して正義を遂行すると云う義務と、大衆の中において無報酬で真理を維持する義務を負わなければならないと云うことは自由主義の原理にはない」と鋭く批判するのである。⁽²⁹⁾

だが、彼のこうした批判とはかかわりなく時の流れは彼の指向する方向とは逆の方へ勢いをもって流れて行くのである。そして、彼は時代の趨勢と自らの立場とを如何に合致させるかと云うことで苦勞するのであり、そこに彼のユニークさを示す「トーリー・デモクラシー」とか、「真の貴族」と云う政策や思考が生れてくるのである。

真の貴族

「これらの親方は真に力強い貴族制度を形づくっている。それは真の貴族である。それは特権を持っている。しかし、それは特権の故に何事かをなしている。それは単に家名によって人々から区別されるのではない。それはワドゲイトにおいて最も知識のある階級である。それは実にその道において完全な知識を持っている。それなりに特質の幾何かをそれが導いている人々に分け与えている。かくして、それは指導するところの貴族であり、従って、一つの事実である」と云う意見を彼は一八四五年に発表している。⁽³⁰⁾

英国憲法に於いて大きな役割りを果しており、又、自らの政治基盤を置いている貴族、地主に対してディズレーリは、彼らがただ単に土地を所有していると云うだけで安穩とその上に跌座していることを認めず、彼らが現実の社会生活に貢献する能力がなければ民衆の指導者としての資質に欠けるのであって、地主階級はあくまで「重い義務を負う者」でなければならないと云うのが常に変らぬ彼の主張なのである。

従って、もし、こうした役割を担う彼らが資本家達と同じように自らの利益を追求するあまり、民衆の指導者としての義務を怠ったり、又、パジョットの指摘にあるように、英国の社会の傾向によって、彼らが好むと好まざるとにかかわらず特権階級としての地位が下落し、彼ら本来の役割りを果し得なくなったのだとすれば、これに代る者を探るか、あるいは、これを補充強化するための手段を考えなければならないのであって、そのためには、社会に秩序をもたらし、伝統ある英国の地方制度を維持するための徳性、才能、財産を具えていれば敢えて門地門閥は必

要ではなく、如何なる階級の者でも支配階級たり得ると云う見解を示したのである。

それ故、彼にとつてはたとえ労働者階級であろうと資質があれば自らの階級に入れることにやぶさかではないし、自らの体制に入つた者は明らかに支配階級として認められたのである。「伝統は『成れるもの』ではなくして『創られるべきもの』となつた。ここでは、伝統的なものは古きが故に価値を持つのではなく、新しい現実社会に有効であるが故に価値を持つのである」と云う指摘にあるように、彼にとつては古きが故に価値があるのではなく、価値がある故に古いものでも存続させなければならぬと云うので、それ故、古いものが価値あるものとして存続し得るようにそれに価値あらしめるためには可能な限りの方法をとると云うのが彼の考えであり、その代表例としての英国の国家構造（憲法）を彼は、「国家は時の創出したものであり、洗練された芸術の複雑な創造物で、精巧な機械が要求する微妙さを以てこれを取扱う」と云う見方をしているのである。⁽³³⁾

ところが現実には、改革と云う名のもとに「芸術の複雑な創造物」である英国の国家体制を支えている古い制度や慣習が攻撃され、進歩と云う口実で破壊されているのであつて、こうした有様を見たディズレーリは、「私が英国の存続の所以とするものとしたものは、コーク卿が尊敬すべき古いものと呼んだところのものに対する尊敬である」と云い、それらを保持してゆくことが英国を存続させてゆく源となるのであり、そこにこそ英国に相応しい自由が存すると云う信念に基づく彼の国家保持のための強い決意と、そのためには如何なる方法をもとると云う柔軟さ⁽³⁵⁾を示しているのである。

そして、「真の貴族」はその代表例を示すものであり、他の階級から新しい要素を補充することによって老化しつつある支配階級に新陳代謝を与え血液の新鮮さを保とうと云う意図から出たものであつて、彼自身ユダヤ人と云う、云わば客観的立場の出身であつたと云う点で古い体制の支配階級を冷静に眺め、⁽³⁶⁾そうした体制を擁護しながらもその体質改善に手を加え得たのだと云える。そして、ディズレーリ自身「真の貴族」の典型的代表例を示しているのである。文筆の面では知られていたとは云え、「アウト・カースト」⁽³⁷⁾と云われるユダヤ人の子として生れた彼が政治に志を抱き、これを貫き首相にまでなり得たのも彼自身「真の貴族」たり得ると確信したが故にであると云えるのであつて、彼は後に「ビーコンズフィールド伯爵として貴族の列に加えられるのである。

尤も、「真の貴族」と云うユニークな発想も社会の風潮と先きに見た貴族の体質を無視しては考えられないのであつて、「来るべき闘争に於

て商工業者が頼みとする武器は新興階級たる気力とその満されぬ欲求とであった。彼らは勇気を有ち、自身のための努力を愛し、而も十分な指導力^{イニシアチブ}を取り得る能力を具えていた。彼等にしてみれば、他面に於てもっと物質的な實際生活の困難を征服しているのであるから、その方法を政治問題に迄進めたくなるのは当然である」と云う指摘にみられるように、経済面に於ける中産階級の目ざましい活躍と成功にもかかわらず政治、社会面では一向に旧来の仕来りが改められず、彼らは依然として旧勢力からは一段低く見られており、そこに彼らの不満があったのである。そして、先きに見た英国の上流階級が貴族、地主、知識階級によって形成されていると云う石田氏の指摘もこれを裏づけるものであると云える。

そこで、こうした社会体制に不満を抱く者のうち根強い貴族的社会制度を打破するために戦った者と、一方では自らその中に同化させてその立場を有利にしていた者とがあるのであって、それぞれに歴史的に意味があるものと云える。そして、そうした旧来の仕来りを打破するために立上ったのが自由主義者であり、功利主義者であり、そして、チャーチストであったのである。

一八四八年を頂点とする人民の立上りによるヨーロッパの政治危機は英国をもその埒外にはおかなかった。チャーチスト運動等に見られる人民主権の要求の運動は古い仕来りを重んじる人々には大きな打撃であったのであって、こうした状態を見たデイズレーリが、民衆の対策を怠っていないはやがて英国もフランスの二の舞いになると考え、これを事前に防ぐためにはどんな手段でもとると思っても不思議ではない。

そして、一方、新興のブルジョアジーのある者は土地を手に入れ地主になることによって、又、貴族との姻戚関係を結ぶことによって次第に貴族階級へ同化していったのである。金のできたブルジョアジー達が次第に体面を気にしだし、家柄を誇る貴族や地主に色目を使つたと云うことは想像に難くない。⁽³⁹⁾ Snob (紳士気取り)と云う言葉はこの辺の事情を示すものであり、新興階級の一部はこの中に同化されていったのである。⁽⁴⁰⁾ そこには先きに見た如き伝統的ではあるが、現実社会の支配階級たる自己の階級の保持、発展のためには他の階級から適当と思われる者を編入し、補充してゆこうと云う融通性のある英国の貴族制度と、その貴族が主な役割りを果している支配階級の体質に大きく負っていたのである。この点で、「真の貴族」論はこうした彼らの体質を反映して打ち出されたものであると云える。

そして、又、社会の状態を眺めていたデイズレーリは、「何ら交渉もない、親愛の情もなく相互の習慣や感情を知らない――二つの国民、恰も彼らは違った地帯の居住者であり、違った星の住人であるかのようだ。又、彼らは別個の保育法で育てられ、違った食物を与えられ、同じ法律

には服していない⁽⁴¹⁾」と指摘しているように、自由主義の隆昌が資本主義の発展を招来した一方では、「労働者階級」と言う新しい階級を生み出し、彼らは自由の名のもとに行なわれる資本主義の競争の中にあって「貧者」として社会の片隅に追いやられており、調和と伝統の国、英国に「富者」と「貧者」と言う恰も違った星の住人であるかのように全く接触のない「二つの国民」が生れたと云うことに強い関心を示しているのである。彼は、これら「二つの国民」を「一つの国民」にしなければならないと云う政治使命に燃え、⁽⁴²⁾そのためには自らの政治生命を賭けてもこれを解消しなければならないとし、それがため、保守主義者の彼が自由党の政策を横取りしたと云われる「トリー・デモクラシー」や「ファンシー・デモクラシー」となり、又、その根底としての「真の貴族」となるのである。

そして、こうした彼の民衆に対する施策が如何なるものであったかと言うことについては、英国を社会福祉の国と云わしめる基盤を築いたと云うことと、労働党のマクドナルドが云った「保守党は、五〇年間政權にあった自由党よりも五年の間に労働者のためにより多くのことをした⁽⁴³⁾」と云う言葉をみればおのずからわかるだろう。彼にとって、民衆、特に労働者階級を何とかしなければならぬと云うことは大事な問題であつたのである。そして、それなりに可成りの成果をあげたことも事実である。

しかしながら、可成りの成果を認められた民衆政策も、「私は民衆は自ら治めることはできないと確信している。自治とはそれ自体は自家撞着である。たとえ政府がどのような形態をとるにせよ、権力は必ず少数のメンバーによって行使されなければならない⁽⁴⁴⁾」と云う意見に見られるように、一般民衆とは自らを治める力はなく、支配階級としての資質及び財産の持主が自らの役割りを認識し、民衆を指導してゆくのが英国本来の民主主義である⁽⁴⁵⁾と云うのが彼の主張なのである。そして、英国の社会的、経済的基盤が伝統的土地制度に存しており、その伝統的土地制度を維持してきた地主、貴族支配の擁護が彼の政治体制の根底を為しているのであって、こうした階級に自らの政治基盤を置いているディズレーリは、これら勢力の確保のために中産階級や労働者階級の一部を上から下に特権を付与すると云う形で選挙権を与えることによって、自らの支配体制の中に彼らを組み込もうとしたのである。

この点で『トリー民主主義の原則は全ての政府は被治者のためにのみ存在することにある』としても、『被治者の利益』は被治者自身によって『下から上へ』追求されてはならず、常に『上から下へ』治者の慈悲的な給付として実現されねばならない⁽⁴⁵⁾と云う「トリー・デモクラシー」に対する指摘はとりもなおさず、彼の民衆に対する考えに通ずるのである。そして、ここに彼の保守主義者、あるいは政治家としての立

場があるのであって、たとえ労働者であろうと資質があれば支配階級に組み入れるのに躊躇しないだけの融通性、開明的な一面を持っていながら、民衆による自治は認められず、支配階級の上から下へと云う慈惠的給付による政治と云うことでしか民衆政策を考えられなかったと云う点で彼の限界があったと云える。従って、「真の貴族」論も彼のこうした立場を如実に現わしたものであって、そこに、彼が一九世紀保守党の政治家であったと云うことが云えるのである。

結

以上、見てきたディズレーリの「真の貴族」論は彼の政治思想の中に於いて可成り大きな位置を占めるものであると云える。

「事実上、もはや英国には貴族政治はなくなってしまった」⁽⁴⁶⁾と云いながらも、彼の思考の中では依然として英国の貴族制的憲法は根強く残っていたのである。そもそも彼がこうした貴族制憲法を擁護するのに熱心であったのはどう云う所から発しているのかと考えた場合、一九世紀初頭のヨーロッパでは、次第に勃興する資本主義とは反対に、中世時代の風物を尊重する思想的基盤のロマン主義が当時の人々の心を把えていた。考えてみるならば、石炭と鉄とによって支配されつつあったヨーロッパ及び英国では、絶え間ないそれらの浸蝕のためにいろいろな社会問題を生んだのであるが、それらの問題を冷静な意識を以て眺め、科学的に解明して人類の幸せを見出そうとする人間と、一方では、騒音も煙もなかった中世の田園の牧歌的な生活をなつかしみ、そこに心の平安を求めた人間とがいたと云えよう。そして、彼ら中世に憧憬の念を抱く者、即ち、ロマン主義者は、進歩は必ずしも人間に幸福をもたらさないと云う考えに立ち、資本主義とそれに伴う物質文明を軽蔑して人間の精神生活を重要視していたのである。

「人間は情熱に基づいて行動する時、はじめて真に偉大なものとなる。人間がイマジネーションに訴える時はこれにうち勝つことはできない」⁽⁴⁷⁾と云うディズレーリの意見を見てもわかるように、人間の合理的、理論的側面よりも、非合理的側面を強調したのである。

こうした合理主義を代表する資本主義と非合理性を代表するロマン主義の時代にあつて、ディズレーリは若くから文学の世界に足を踏み入れ、政治家としての活動をはじめながらも依然として文芸への愛好を捨てず生涯を通じて数々の作品を発表しているのである。こうした点から彼は「情緒的人間」⁽⁴⁸⁾と云われるのであって、この指摘は彼の政治的立場を考える場合、十分領けるものである。

こうした「情緒的人間」である彼が、政治の場に立った場合、情緒だけで政治を動かすことができないと云うことは十分認識していただろうことは想像に難くない。従って、自ら憧憬しているロマン主義とは裏腹な現実主義が必要になってくるのはその立場上やむを得ないと云うことを彼も考えていたのである。この点で、彼はロマンチズムとリアリズムを兼ね具えた人物であったと云える。そして、これが彼の政治政策及び政治思想にも現れてくるし、そこに彼の政治家としての特質を示していると云える。

かかる点からして、中世以来の伝統を汲む英国の貴族制憲法を擁護する一方、資本主義による中産階級の抬頭とそれに伴う「労働者階級」と云う「貧者」の問題をそのリアスティックな眼で眺め、その両者を調和させると云うことが彼の変らぬ政治姿勢であったと云える。そしてその代表的な例がここでとりあげた「真の貴族」論であって、云わば、世の中の潮流とは逆行するものである貴族制的憲法をあくまでも擁護すると云う立場を捨てずに、常に新しく生れてくる政治問題をこの憲法の中に組み込むと云うことで苦心をするわけであって、端的に云うならば、彼の政治とはこの常に変らぬ英国憲法に対し、世の中の目まぐるしい変化を如何にして辻つまを合せて吸収消化してゆくかと云う、云わばテクニクにあったと云える。それも、彼をして一九世紀英国に於ける偉大な政治家と云わしめるほどのものであったと云う点からして、彼が如何に優秀なテクニシャンであったかと云うことが想像できる。そうした点で、彼と並び称されるグラッドストーンの勤勉実直なタイプとは好対照を示しているのである。

そして、「真の貴族」論は、崩れつつある貴族制憲法と、日々もちあがる「貧者」の問題をうまく組み合わせるためのテクニクであったと云えるわけであるが、それとて、自由党が没落して労働党が取って代った今日の英国政界にあって依然として生命を保ち続ける保守党を擁護しようとする英国の政治的、歴史的風土に大きく負っていることは否定し得ない。そう云う点で、ディズレーリも英国の保守的政治風土の申し子と云って過言ではあるまい。従って、貴族制憲法と共に彼が大いなる関心を示した「貧者」の問題とは云うなれば相反する政治的要素であると云えるわけだが、それにもかかわらず、彼がこれらの問題を正面から取組んだと云う点で彼の偉さがあると云えるわけである。だが、如何に偉大な彼とて、やはり、一九世紀の政治家であることを顕著に現わしているのであって、その民衆観などを詳細に見ることによってその限界を我々は知ることができるのであって、そこに彼の立場があったと云える。

註

- (1) Disraeli, B., *Sybil, or two nations*, 1845.
- (2) この点についてトレヴェリアンは、十八世紀の労働者は政治的な力はなかったが、日常の生活に於いては多くの特権を所有しており生活を楽しんでいたが、産業革命の結果彼らが没落したと云うことを指摘している。
- (3) Trevelyan, G. M., *British History in the Nineteenth Century and after 1782-1919*, 1944, p. 142.
- (4) 小松春雄「ベンジャミン・ディズレーリの思想と行動」(南原繁先生古稀記念「政治思想における西欧と日本」上、一九六一)一八九頁
- (5) Hollis, C., *The Two Nations—A financial study of English history*, 1935, 平井昌夫訳「イギリス金融罪惡史」昭一八、一八〇頁
- (6) そこでは、「紳士道の養成は紳士の養成所と専ら考えられていたイートン、ハローのようなパブリック・スクールやオックスフォード、ケムブリッジの両大学の教育法にその反映を見ずして己まなかった。それらの学校は最近に至るまで知的な教育の理想を第一に置いてはいなかった。……パブリック・スクールや大学で重んぜられたものは体育競技で、学生用語で *smug* と云えば『運動に興味をもたぬ面白くない男』という意味である」(石田憲次「近代英国の諸断面」昭一九、二〇九—二一〇頁)と指摘されるような教育方針のもとに紳士教育が行なわれていた。そして、トネヴェリアンも、マシュー・アーノルドがパブリック・スクールの卒業生でもって構成されている英国の支配階級を「野蛮人」と云っていると指摘しているし、又、パブリック・スクールの教育が「徳」と「泥臭く力強い人間」を作ることにあつたと云っている。Trevelyan, G. M., *English Social History*, 1942, p. 520.
- (7) それとこれらと同じようなことは、インゲ (Inge, W. R., *England*, 1933, 小山東一訳「英国論」昭一五、七二—七三頁) やエンソン (Ennerson, R. W., *English Traits*, 1911, 加納秀夫訳「英国の印象」昭二二、一一頁) も記している。
- (8) Inge, 前掲訳書、一九五頁
- (9) 「産業的富が無数の形態を執つて勃興したことによって、貴族の競争相手が一人、登場して来た、この方は貴族よりは概して頭もよく、も少しだけ礼儀作法を心得、思想的にも少し闊達でさえあれば、難なく社会的優位を占めることができた筈である」(Bagehot, W., *The English Constitution*, 1867, 深瀬基寛訳、昭二二、一三八頁) 又、「変化は一七六〇年以前に始まり、変化の過程はジョージ三世治世の前半に従前よりも急速に進んだが、狂熱的な速度ではなかった。足並をそろえて進むべき政治機能を超えて加速度的に進んだのはフランス革命の勃発と対仏戦争の後であった。産業革命は恰も英国が革命宣伝と支配階級の恐慌で困惑し、その存亡のために戦うという最も不幸な状態の下で起つた」(Inge, 前掲訳書、一九二—一九三頁)と産業革命について記述されている。
- (10) 一九世紀の貴族について、「彼等は古き秩序と其の感情風を擁護して中産階級の侵攻に対立した。地主達は依然として地方の人々から本能的な婦服を受けて取囲まれ、彼等の支持を得ていた。実に数世紀の間というものはこれら一城の主や荘園の領主から政治の権威と財政勢力、裁判権と教区の慈善事業とが發出していたのである。一八四〇年の英国に於ては此等封建制度の大名は経済的には凋落しても其の勢威は失墜せずに、依然として自己を通して又は郎党を通して偉大なる社会勢力を振つた」(Carr-Saunders, I., *L'Angleterre moderne, son évolution*, 1911, 小樽山政英訳「近代英国」昭二六、一〇二—一〇三頁)、「彼等は近代社会の全傾向の犠牲になっている、即ち平均を上げる代りに頂点を比較的否、あわよくば絶対的に下げようとする傾向の犠牲である。社会の多彩な色どりと凹凸が減少するにつれて、貴族階級は、その特有の権勢を保つ唯一の武器を失うのである」(Bagehot, 前掲訳書、一三八頁)、「貴族の、その尊嚴的資格に於ける効用は極めて大きい。それは『女王』に匹敵するほどの尊崇を呼ぶことではないにしても、それでも大したものである。……貴族の旧家となると無限の尊敬を受ける。その人間がただ生きていくだけで、どれだけの効用を発揮するかというと、まず、民衆の心のなかに、肉体的な服従の感覚を呼

び起して、それが一種の精神状態にまで高まるといったようなものである」(Bagehot, 前掲訳書、二二三頁—二三四頁)と云う記述が為されている。

(9) 石田、前掲書、二四四頁

(10) 新井嘉之作「イギリス近代地主論」歴史教育三卷、一九五五・二二号、六六頁

(11) こうした貴族、地主階級の柔軟性は単に彼らだけのことではなく、現実的、妥協的精神が英国の特色であると云う指摘からすると不思議ではない。(Cazanian, 前掲訳書、一〇六頁。石田、前掲書、三九一—四〇一頁)この点についてトレヴェリアンは、「フランスの貴族と違い彼らは排他的な階級制度を持っていなかった。そして、彼らは中産階級との結婚を否定しないし、又、彼らの子弟を商業の道に進ませることに躊躇しなかった」(Trevelyan, op. cit., p. 30.)と云っている。

(13) Emerson, 前掲訳書、一八〇頁

(14) 石田、前掲書、二二三頁—二二三頁

(15) Emerson, 前掲訳書、一九〇頁

(16) Emerson, 前掲訳書、一八七頁

(17) 「イギリスの貴族は、自分の姓を土地につけないで、その土地の名をとってその称号にする。これは、自分の生れた土地を代表する者であることを示しているであろう」(Emerson, 前掲訳書、一八五頁)と云う指摘もそれを裏付ける証左の一側面と云えよう。又、「英国の貴族の一番肝要な資格は土地の所有者であるということであった。産業革命以後に於てはやや事情の違うところがないでもないが、それ以前に於ては土地はあらゆる生産や、あらゆる収益の源泉であった。これを所有する者は其の上に棲息する凡ての者(人間をこめて)の生命を制すると言って差支えない」(石田、前掲書、二四五頁)と云う指摘もなされる。そして、この点で、宮廷人としてバリーで遊びはうけていて自らの所領をかえりみなかったフランスの貴族と違うのである。

(18) Disraeli's speech in the House of Commons, Feb. 24, 1846, quoted in

ベンジャミン・ディズレーリの「真の貴族」について

White, R. J., *Conservative Tradition*, 1950, p. 190.

(19) この点については、(7)で見たとおりであるし、又、トレヴェリアンは「多くのフランス貴族がそうであったのとは違い、英国の貴族は自らの所領での田園生活を享受しており、ノーフォークのコーク卿のように『開明的な領主』となり、羊を増やしたり、かぶらを育てたり、田畑を耕したりした。そして、領内の百姓達に父親のような親愛の情を以て接したのである」(Trevelyan, op. cit., p. 20.)と云っている。そして、『栄爵は義務を伴う』という言葉にもあるように、貴族・紳士の義務本分は百姓素町人のそれよりも余程重くなければならぬ。然らばそれは何かというと、封建貴族からの伝統として、屑々たる一身一家のことに拘らず、家の子弟党を可愛がって、いざ鎌倉となれば、それ等家の子弟党を召連れて、君国の為に生命を顧みずして勇戦奮闘することが、即ちそれである、その義務の前半の下民を愛撫するという点では、英国の貴族階級は非常によくその職責を尽したといわれている」(石田、前掲書、二二五頁)と云う指摘がなされるのである。

(20) 尤も、トレヴェリアンはそうした教育に対して、「近代英国の成功も失敗もその多くはパブリック・スクールに負っている」(Trevelyan, op. cit., p. 521.)とその功罪が相半ばしていることを指摘している。

(20) 石田、前掲書、二五二頁

(21) 地主の温情主義について、「而も依然として彼等の權威は間接的にも直接的にも国民の大部分を支配していた。地方社会の全員は彼等の勢力範囲の境内を一步も出ず、必ず伝統の階級制度に従って群居していた。大農も小農も一切の農夫が然りであり、家令より獵場番人に至るまでの召使も、近隣の市場町の小売商人も店主も職人もさては弁護士、医者、牧師に至るまで孰れも皆、利害関係より、領主の惜しみなく与える恩恵により、或は趣味と習慣を同じくすることに依て、城主と結びついていた」(Cazanian, 前掲訳書、一〇三頁)と云われるのである。

(22) Disraeli, *The Spirit of Whiggism*, 1836, Whigs, pp. 349~350. 拙稿においては小松氏前掲論文一八八頁より引用

- (23) こうした憲法観はひとりディズレーリだけのものではない、エマソンは英国の印象を「社会の骨組みは貴族的で、国民の感情は忠誠に厚い。貴族の身分、家名、風俗は国民の憧憬の中心で、必要な支持は十分にうけている」(Emerson, 前掲訳書、一七九頁)と記述しており、又、一九世紀英国の自由主義者ミルはその制度そのものには反対しているが、英国の憲法が貴族的であると云うことは認めている。(Mill, J. S., Autobiography, 1873, 西本正義訳「ミル自伝」昭二二・一〇七頁)
- (24) Disraeli's speech at Manchester, April 3, 1852, quoted in Writ and Wisdom of Benjamin Disraeli, p. 303.
- (25) この点についてトレヴェリヤンは、「一八世紀の政治精神は平等に根づいているのではなく、各階級の調和に基づいているのである」(Trevelyan, op. cit., p. 19)と云っているが、これは一八世紀だけのことではなく、それ以前、以後の時代にも当てはまることである。
- (26) この点についてトレヴェリヤンは、「貧乏人も金持ちも互いに自分達の『自由なる憲法』に愛国的な誇りを持っており、彼らは大陸の国々の奴隷制的憲法に絶えず抵抗を示していた」(Trevelyan, op. cit., p. 19)と指摘している。
- (27) Monypenny, W. H., and Buckle, G. E., Life of Benjamin Disraeli, new ed. 1929, vol. I, pp. 696~697.
- (28) 坂井秀夫「ディズレーリの帝国主義とその史的背景」国際法外交雑誌、五八巻、昭三四、五号、四頁
- (29) Disraeli's address to the elector of County of Buckes, 1847, in White, op. cit., pp. 225~226.
- (30) Disraeli, B. Sybil, book III, chap. IV.
- (31) Bagehot, 前掲訳書、一二九頁
- (32) 河合秀和「イギリス国家構造と帝国主義—第二次選挙法改革によせて」歴史学研究三三四号、一九五九・一〇、五頁
- (33) Disraeli, The Vindication of the English Constitution, 1835, in White, op. cit., pp. 38~39.
- (34) White, op. cit. pp. 38—39.
- (35) 彼の政治家としての柔軟さを示す例として、一九世紀半ばの英国は自由貿易が盛んになっていた。そのため従来保護貿易主義であった彼は、国民が望むならばと云うことで自らも自由貿易主義に転向したことなどがあげられよう。
- (36) トレヴェリヤンはこの点について、「外国人の眼」で以って眺めたと云っている。Trevelyan, op. cit., p. 344.
- (37) Trevelyan, op. cit., p. 344.
- (38) Cazamian, 前掲訳書、三七頁
- (39) この点トレヴェリヤンは彼らがそうした上流階級に強い関心を抱いていたと云うことを指摘している。Trevelyan, op. cit., p. 155.
- (40) この点については「英国の貴族主義が今以てなかなか盛んであるいま一つの理由は貴族や紳士の側になくて中流や下流の側にある。英国の民衆は一口に言って貴族崇拝的 snobish なのである」(石田、前掲書、一五八頁)と云う指摘がなされる。
- (41) Sybil, book IV, chap. VIII.
- (42) この点について「ディズレーリは心から貧乏人の悲惨な状態に対して憐憫の情を示した」(Hollis, 前掲訳書、一四〇頁)と指摘されている。
- (43) Hearnshaw, T. J. C., The Prime Minister in the 19th Century, 1929, p. 201.
- (44) Disraeli, The Spirit of Whiggism. 村岡健次「ディズレーリの保守主義」史料、四七巻一号、昭三九、一二五頁より引用
- (45) 河合、前掲論文、一一頁
- (46) Disraeli, Sybil, book II, chap. IX.
- (47) Disraeli, Coningsby: the new generation, 1844, books W., chap. XIII.
- (48) 小松、前掲論文、一七一頁